

## 文華苑の歴史

## —三春滝桜存続を願う—

日本三大桜の一つと言われる福島県田村郡三春町の天然記念物、樹齢1000～1200年の三春滝桜（ベニシダレザクラ）の種子から育てられた苗を頂いて、20年以上になるのでしょうか。17本の内、2本枯れてしまいましたが、あとは立派に生長しています。大きなもので樹高9m以上あり、幹周は1m、樹冠は12m×9mに達しています。開花も見事です。親の滝桜は、樹高19m、幹周約9.5mで、樹冠は、東西に約22m、南北に約17mと、較べものにならないほど大きなものですが、樹齢が約25年であることを考えますと、凄まじい生長ぶりであると思われまします。

これらの桜は、すべて実生であるため、親に似たもの（紅枝垂れ）は少なく、1本だけ花色も濃く、親に最も近い性質を備えています。それが、最近樹勢が衰えて来たのです。この桜は、過去に伐採木が倒れた際に、まともに太い枝が当たって枝が裂け、今でもその傷が塞がっていないのです。木が弱ったのは、これが原因であると思われまします。この貴重な桜を枯らすことは出来ません。力を付けさすため十分に肥料を施し、整枝も行って、何とか樹勢が回復して来ました。

殖やすことも考えました。親木の性質を得るためには、挿木と接ぎ木が手っ取り早い方法です。平成9年6月、芽を採取し緑密封挿しを行いました。活着しませんでした。平成10年、緑密封挿しと緑芽接ぎを行いました。失敗に終わりました。悪条件が重なり、この様な結果になったのだと思っています。また、穂木そのものに元気がなかったのも原因であったと思います。5・6月の接ぎ木や挿し木は、桜にとって無理があったのでしょうか。

この様な失敗を重ねながら、平成11年に、元気な穂木が得られましたので、最も無難な3月に挿し木と接ぎ木を行い、ようやく成功したのであります。無いとは思いますが、もし、三春滝桜の親に最も近い性質の桜が枯れたとしても、安心と言えまします。これだけ自分自身、三春滝桜の魅力に取り付かれてしまっていたのです。

全国には、相当数のエドヒガン系のベニシダレザクラがありますが、自然に生育するものは殆ど無く、植生によるものが大半です。樹齢100年以上のものは、殆どが人の手によって管理されて来たと考えられます。枝が垂れながら大

樹に生長する植物は少なく、エドヒガンザクラの突然変異によって、出現したのだと言われています。桜以外に枝垂れる種類は沢山ありますが、葉が出ずに花いっぱいになるような枝垂れの巨木は見当たりません。打ち上げ花火の様に、勢いがあればあるほど高く上がり、大きな放物線を描く。その軌跡は、自然が作り出した素晴らしい芸術作品なのです。

枝垂れの植物には、面白い現象があります。枝が折れたり強く切られたりすると、今度そこから出て来る芽は、枝垂れずに立上がるのです。ある種の枝垂梅では、深切りを繰り返していると、いつかは枝垂れの性質が現れなくなることがあります。普通の植物を見ますと、例えば、ケヤキの木は、枝が大きく折れたり強く切られたりすると、今度出てくる芽は枝垂れになり、枝が生長するに従って、立ち上がってきます。枝垂れとは全く逆の現象となります。

この様な植物の生長現象は全てホルモン（オーキシン）の作用によるもので、光と地球の重力が影響しています。一般に、屈光性、屈地性と言われるものです。若い芽が折れないための工夫であり、

生きて行くための手段で理想的な生長であると思います。

枝垂桜の生長には、他に大木や将来大木になる可能性のある樹木の無い、肥沃で日当たりが良く、風当たりの少ない環境地が適していますが、この様な条件の整った自然での環境は、無いに等しいと言えまします。人間が作り出した物でなく、何百年もこの地球上に存在しているのですから、あえて人間が手を加える必要はないとは思いますが、ある程度の生長まで、何等かの助けを借りなければ、大樹と成り得ないのは確実で、もし、手を加えなければ、この世から姿を消してしまっているに違いない貴重な植物なのです。

文華苑の枝垂桜は、天然記念物の子孫であるから見事だと言われるものではありません。樹木そのものが雄大で、優しく、素晴らしいのです。平成10年の秋の台風で3本倒れてしまうことがありましたが、それも起こしてもらって、元気に育っています。これから何が起こるか分かりませんが、親に負けず、樹齢1000年以上、大和文華館の文華苑に存続してほしいものと願っています。

（管理部保安 大平良一）



春の様子



夏の様子